

行為と時間

——生活世界的時間の解明に向けて——

飯 田 卓

序論

A・シュッツは「意味問題は時間問題である」(Schütz 2004: 93)と定式化し、「時間」に準拠することによって、所与の「志向的体験」における充分に境界づけられた「経験」の構成を基礎づけるのであるが、その論法はまた、彼の行為理論においても一貫して変わらない。行為の本質たる企図の構成は、「今この様に」における反省的志向を通じて自らの「過去」の諸行為に関わるだけではなく、「未来」の諸行為にも関わることによって、体験とは区別される「経験的次元」を組織化するからである。

本稿においてまず主題化したいのは、その都度の「今この様に」における注意変様に相関して意味が顕現化するとしても、この他方の極にある反省を行う当該行為者は、依然として体験の流れの外に出ることはない、という論点である。すなわち想起を通じて意識に内在した「客観的時間」を構成し、そこに体験を措定する作用は、

「志向的体験」のなかで行われるのである。しかし、この「客観的時間」との対比の下にある限りで構成される「主観的時間」は、それまでの前反省的な「志向的体験」とは構造的に異なる時間形式を備えていると考えなければなるまい。企図を構成する反省作用は、「過去」と「未来」という時間次元から「現在野」を境界画定するが、この幅の規定された「現在野」は、以前の「志向的体験」である分節化されていない「現在野」とは差異化された、新たな「時間パースペクティブ」を構成するからである。

従って本稿の目的は、シュッツの行為理論を手掛りに、彼によって必ずしも明示的には論じられていないこの「主観的時間」の構造を検討し、そこから導かれる「志向的体験」と「客観的時間」の織り成す重畳的な時間構造を「生活世界的時間」として呈示することにある。以下ではまず、議論の前提として(一)「志向的体験」の構造を確認し、そこに含まれている問題点を指摘する。次に(二)内在的な「客観的時間」に位置づけられた行為の企図と、「主観的時間」との関係を検討し、両者がともに水平的なレベルにある限り

で、空間的な外延は、内包的な体験に回収し尽されないということを示す。そして(三)この内在的な「客観的時間」を構成的先行段階として、意識を超越した「客観的時間」が、外的行為の下に内在化されるあり方を検討する。最後に(四)質的に異なる複数の時間の交錯から構成される「生活世界的時間」の三つの位相を開示することで、結論として、「志向的体験」は自己同一的ではなく、「客観的時間」と相互反映的關係にあること、また自然的態度において時間を構成する自我は、行為を媒介とした自己言及的循環という仕方でのみ「志向的体験」上に位置づけられることを導出する。

(一) 志向的体験の時間的構造

以下では、本稿の目的に必要な限りで、「志向的体験」の構造について考察してゆく。シュッツによれば、意識とはまずもって、ある「今この様に」から、新たな「今この様に」へと絶え間なく移行してゆく、不可逆的な「体験経過」である。われわれに直接与えられているこの体験は、異質な諸要素が相互に浸透し合いながら連続的に変化してゆく「質的多様性」の流れという意味で、「持続経過」とも呼ばれる (Schütz 2004: 139)。

この体験は、「今この様に」という、今の理念的限界点である「原印象的位相」において、一方で先行した体験を「過去把持」的変態態として同時に構成しつつ、他方で後続の体験へと「未来予持」によって同時に方向づけられている「体験連関」として特徴づけら

れる。ここでは、「原印象的位相」を中心に伸びる「過去把持」と「未来予持」の連関という幅を持った「現在野」——W・ジェイムズの言う「見かけ上の現在」——が構成されているのである。意識はまた、自らをこの「体験連関」として生成させてゆくなかで、一方で「横の志向性」において「志向の対象」を把握しつつ、他方で「縦の志向性」において自らを非主題的な仕方では保持する「志向的体験」としても特徴づけられる (Husserl 1969: 81-83, Schütz 2004: 140-44)。なお、この「志向的体験」と「志向の対象」は、それぞれ実体として存在しうるものではなく、「志向的体験」の内容と形式が、そこにおいて前述定的に把握されている「志向の対象」によって同時に規定されているという意味で、志向的な相関関係にあることに留意しておくことが肝要である。

そして、その都度の「今この様に」から、先行する統一的な「志向的体験」に対して反省的な眼差しを向けることを通じて、従って先行の体験を想起することを通じて、意識に内在した「客観的時間」が構成されると同時に (Schütz 2004: 143) ʼある体験が有意意味な「経験」として際立たせられる (Schütz 2004: 146)。¹⁾ じつにおいて、異質な諸要素の絶え間ない流れであった「志向的体験」は、一方で明確な輪郭を持った特定の「経験の対象」へと、他方でそれを把握している明確な「自我」へと差異化されることになる。要するに体験の「質的多様性」が、時間の空間的把握、すなわち時間の空間化を通じて「量的多様性」へと置き換えられるのである。¹⁾

以上、シュッツの議論を敷衍しつつ、「志向的体験」の構造について手短に確認してきたが、ここで問いが二つ生じる。一つは、「志向的体験」に向かう反省あるいは想起は、一体どこにおいて行われるのか、という問いである。シュッツに従えば、それは、「志向的体験の外部に出る」(Schütz 2004: 145) ことによって可能になるという。但しこれは、「意識の流れ」という比喻に対応した表現であり (Schütz 1970: 80, 1996: 255)、額面通り、われわれが「志向的体験」の外に出てしまうわけではない。だがいずれにしても、そこにおいて反省が行われる「志向的体験」の外部と、「志向的体験」それ自体とは、すなわち先行する体験に向かう反省的志向のために固定した時点に立ちとどまることで組織化される体験の位相と、反省的志向に関わりなく流れ去る体験の位相とは、それぞれ質的に異なる時間形式を備えているはずである。ここでは差し当たり、前者を「内在的―客観的時間」との対比によって「志向的体験」と差異化された「主観的時間」、後者をその背景をなす「志向的体験」と考えておく。「根源的な体験」を背景に、「主観的な体験」が前景化するのである。

いま一つは、「志向的体験」の時間的構造である「現在野」あるいは「見かけ上の現在」の幅はいかにして決まるのか、という問いである。「見かけ上の現在」は、「見かけではない現在」との対比において意味を持つ。「原印象的位相」から、一方で過去へ、他方でも来へと伸びる「体験連鎖」は、それらが「把持」と「予持」の連

関である限り、決して現在の位相を越え出ることはない。確かに、「志向的体験」における反省的志向は、「内在的―客観的時間」とともに過去を構成するが、この「過去」と「現在野」がいかなる仕方に関係しているのかについては定かではない。さらに現在野は、それと対比される「過去」だけではなく、「未来」があって初めて、その幅が規定されうるものである。そうである以上、「現在野」の境界、あるいはそうした境界を画定する機制が探求されなければならないまい。

これら二つの問題はともに反省的志向に関わる点で密接な関係にあり、両者を切り離して考えることはできない。以下の節では、反省的志向の本来的な契機となる行為について中心的に検討し、これらの問題に対するひとつの有効な視角を用意したい。

(二) 行為の企図と内在的―客観的時間

シュッツの行為理論に従えば、行為は、その目標が、予想という将来に向かう想起において意識される限りで、行為の上位概念に位置づけられる行動一般と区別される。行為とは、前もって与えられた企図へと方向づけられた行動として定式化されるのである (Schütz 2004: 155)。企図とは、一方で「実行可能性」という制約を受けつつ、他方で生活史的に規定された「当面の関心」に制約されながら (Schütz 1962: 72-4)、空想的想像作用においてすでに

「完遂された行為」[Handlung, act]を予想することである (Schütz 2004: 157, 159, Schutz 1962: 73)。すなわち想起を通じて意識に内在した「客観的時間」を構成し、そこにおいて見出される有意義な過去の諸行為を未来完了時制へと反転させるのである。従って未来完了時制に措定される過去の行為は、当面の目的にとってレリヴァンスを持ち、なおかつ現在の行為の目的志向と類型的同型性を持ったすでに「完遂された行為」ということになる。⁽²⁾

ここで重要なのは、「今この様に」における想起あるいは反省が、「過去」の諸行為を経由して、「未来」の諸行為に関わると同時に、「過去」と「未来」を備えた「内在的―客観的時間」が構成されるということである。そして以下に見るように、行為の本質をなす企図によって、「現在野」の幅が規定されるのである。

「企図が見かけ上の現在を統一し、その境界を画定する。過去に関する限り、見かけ上の現在の限界は、利用可能な知識のかの区画に沈殿して保有されている、現在の企図に依然としてレリヴァントな最も遠く離れた過去の経験によって規定され、未来に関する限り、その限界は、前もって思い描かれた企図の及ぶ範囲、すなわち未来完了時制において依然として予想されている時間的に最も遠く離れた行為によって決定される。」(Schütz 1964: 291, cf. 1962: 253)

この段階で漸く、(一)節の最後で暫定的に述べておいた「主観

的時間」について精確に論じることができるようになる。すなわち、所与の「志向的体験」と差異化された「主観的時間」とは、過去把持の連鎖と未来予持の連鎖が到達する限界の外部として指示される「過去」と「未来」から境界画定された「現在野」の位相なのである。われわれが「志向的体験」にとどまり続ける限り、そのような外部は存在しないのであるから、「志向的体験」と「主観的時間」はそれぞれ異なる時間構造を持つとすることができるとはいえ、われわれが「主観的時間」に属している場合にはいつでも、それと同時に「志向的体験」にも属しているということには留意しておく必要がある。

「内在的―客観的時間」と「主観的時間」との関係について言えば、未来完了時制に措定された「完遂された行為」において、空間的外延と質体験が交錯し分化することになる。つまり想起によって、「内在的―客観的時間」に空間化された「完遂された行為」がなければ、それに方向づけられる実際の行為遂行過程としての「進行中の行為」[Handeln, action]（主観的時間）は意味をなさない、ということである。要するに、「完遂された行為」が、「進行中の行為」を有意義な体験にするのである。

しかし、ここで注意すべきは、確かに時間系列の水平的レベルにおいて、空間的な外延は、内包的な「主観的時間」あるいは「主観的体験」に回収し尽くされることはないが、しかし同時にその垂直的レベルにおいては、「志向的体験」の地平が両者を包摂してしま

う、ということである。この限りにおいて、空間的な外延は再び内包的な「志向的体験」に回収されてしまうのである。この点については、改めて触れることになろう。

以上、行為と時間との関係について検討してきたが、本節において言及されている行為は、厳密な意味ではいまだ外的世界に關与しておらず、その意味で、行為に關するここでの議論は、企図の構成のレベルにとどまっている。外的世界において實際に行為が遂行されるためには、企図を現實化する決断が必要なのである。こうした事情を踏まえるのであれば、行為は「ワーキング」という概念の位相の下に再検討されなければなるまい。

(三) ワーキングと超越的—客觀的時間

シュッツは、ジェイムズに倣って、企図を目的に変換しそれを現實化する決断を自發的な「フィアット」[Fiat, fiat]⁽³⁾と呼び (Schutz 1962: 67, Schutz 2003: 138, 148, 2004: 166)⁽⁴⁾ この「フィアット」に導かれて、實際に外的世界に介入してゆく行為を「ワーキング」[Wirken, working]⁽⁴⁾ として理念化している。

「ワーキング」とは、企図に基づきながら外的世界においてなされる行為であり、なおかつ企図された事態を身体上の動きを通して實現しようとする意図によって特徴づけられる行為である。」(Schutz

1962: 212)

「われわれは身体上の動きのなかで、またそれを通して自らの持続から空間的あるいは宇宙的時間へ移行する。従ってワーキング行為は、それら両者の時間次元の性質を帯びている。われわれは外的時間と内的時間という両次元を、ここで生ける現在と名づけた単一の流れに統合することによって、ワーキング行為を、外的時間のなかで生じる一連の出来事として体験していると同時に、内的時間において生じる一連の出来事としても体験しているのである。それゆえ生ける現在は、持続と宇宙的時間が交差することのなから生じてくる。」(Schutz 1962: 216, cf. Schutz 2003: 134)

外的世界の諸対象は、われわれの努力によってのみ克服されうるような抵抗を与えることによって、われわれの自由な行為の可能性を制限する (Schutz 1962: 209, 227, 342)。⁵ それゆえ、企図を目的に変換し實際の行為を遂行するに際して、われわれは世界の時間—空間的な存在論的構造を顧慮しなければならない。つまり「内在的—客觀的時間」において構成された企図を、意識を超越した「客觀的時間」、すなわち「宇宙的時間」に外在化する必要に迫られるのである。さらにわれわれは、時を経ていつかは死ななければならないという確信から生じる、自らの有限性についての感情だけではなく、「内的時間」と「外的時間」が交差するところに生じる秩序——同

時性と継起性の秩序——のために、決して無限の「ワーキング」を同時に遂行することはできない (Schutz 1970: 179, 182)。そうであるがゆえに、ここにおいて行為の諸企図は優先性の体系に従って、つまり「重要なことから先に」というあり方で、配置あるいは調整されることになる。

ここで注意すべきは、「宇宙的・客観的時間」がそれ自体、実体として行為者に賦課されるのではない、ということである。意識を超越した、すなわち意識と関わりを持たない「客観的時間」は、それ自体が意味を持っているのではなく、それぞれの行為者によって構成される「至高の企図」(Schutz 1970: 50) に収斂し、それゆえに目的指示連関をなしている諸企図との相関において意味を持つ。われわれは「ワーキング」を通じて、賦課的な「客観的時間」を内在的な「客観的時間」に変換するのであり、その限りにおいて「客観的時間」が受肉化するのである⁽⁶⁾。

「ワーキング」を介したこの構成が、「内的時間」と「外的時間」が交差するということの含意であり、従って、「主観的時間」(志向的体験)のなかで生起する「進行中の行為」と、「宇宙的・客観的時間」に位置づけられた「完遂された行為」が交差するという事態の内実である。そしてこの「進行中の行為」の位相、あるいは「完遂された行為」に向かう前反省的なベクトルが、「生ける現在」を構成する。実際の行為によって初めて、幅の規定された「現在野」あるいは「見かけ上の現在」が、「生ける現在」に変貌するのであ

る。ジェイムズの「フリンジ」という概念を用いて敷衍すれば、「完遂された行為」が意識の実質的諸部分を成し、こうした実質的諸部分の間の意識たる「進行中の行為」が、地平的な推移的部分を成していると考えられよう。

ところで、ここには、「内的時間」が「外的時間」に意味を与え、同時に「外的時間」が「内的時間」のあり方を照射するという、相互反映的な構造が見出せる。この相互反映性によって導かれる時間が、「内的時間」と符合した「市民的・標準的時間」であり、シュッツによって、この時間は「自然的態度のうちにある相互主観的な日常生活世界の普遍的な時制構造」(Schütz 1962: 222) として位置づけられることになる。そしてこの「市民的・標準的時間」が客観的基準として、企図を包摂するプランを支配し、行為者ごとに多様なプランを相互主観的な仕方で調整することを可能にするという。

しかしながら、それはいかなるレベルにおいて妥当することなのだろうか。「市民的・標準的時間」がその「時間的意味」とともに行為者間で同一の基準として妥当するのは、同一の限定的意味領域において、特有の「時間パースペクティブ」を共有する行為者間に限定されるのではないだろうか。だがここで想起すべきことは、シュッツによって、「ワーキング」と相関した「ワーキングの世界」は、日常生活世界の極限概念として理念化されている、という事情である (Schütz 1962: 233, Schütz & Gurwitsch 1985: 352, 那須 一九九七: 三九, Schütz 2003: 143, 379)。従ってそういうものとして主題

化される「日常生活世界」においては、いまだ多様な内容を持った諸々の限定的な意味領域は構成されてはいない。だからこそ「ワーキングの世界」あるいは日常生活世界という単一の意味領域において、「市民的・標準的時間」が普遍的な客観的基準たりうるものとして位置づけられているのである。

だが、このような事情を認めるにしても、すでに多様な意味領域で満ちている内容の充実した日常生活世界においては、「市民的・標準的時間」は無条件に客観的時間たりえないのではないだろうか。

「限定的意味領域の一つの認知様式である」特有の時間パースペクティブは、自然科学における同質的な時間―空間から区別されるし、それはまた、次の時間から、すなわち内的時間と世界時間の交差点に起源を有し、なおかつ相互主観的な生活世界の普遍的な時間構造の基礎として働く社会的な標準的時間から区別される。」

(Schütz & Luckmann 1979: 53)

この引用文に見られるように、多様な限定的意味領域がすでに生成されている場合、「市民的・標準的時間」は、それぞれの意味領域に特有の「時間パースペクティブ」と差異化されてしまう。それゆえ、「市民的・標準的時間」が普遍的な「客観的時間」たりうるためには、そもそも「主観的時間」が、行為者間において共通する「時間パースペクティブ」として保証されていなければならないの

ではないだろうか。しかし、このような発想はいかにも素朴である。社会的相互行為について考察する場合、われわれはまず他者との間に何らかの共通するものを求めがちであるが、そもそも共通するものがあるから、相互行為が成り立っているのではない。実は、相互行為に支障が生じるからこそ、両者に共通のパースペクティブが見出しうるのである。⁽⁸⁾この問題についてはのちに立ち返ることにして、ここでは差し当たり、「主観的時間」の多様なあり方に相関して、「市民的・標準的時間」も多様なあるいは多元性を持つということだけ述べておく。

それでは、この「市民的・標準的時間」と「生活世界的時間」は、一体いかなる関係にあるのだろうか。「市民的・標準的時間」の共有という事態が、「生活世界的時間」なるものを構成するのだろうか。仮にそうであるとすれば、「生活世界的時間」は「市民的・標準的時間」に汲み尽くされてしまうのだろうか。次節では、こうした問題を念頭に置いて、「生活世界的時間」の諸位相について検討してゆく。

(四) 生活世界的時間の構造

「生活世界的時間」あるいはこれに準ずる概念について、シュッツは以下の四箇所断片的に触れているに過ぎず、その実態については、ほとんど説明されていない。「生活世界的時間」ということ

で、一体彼が何を論じようとしていたのかを検討するために、ここではまず以下の引用文を確認する。

(Schütz&Luckmann 1979: 75)

- (d) 「疑問の余地のない世界の時間構造の特徴は、内的時間（持続、すなわち個人の意識の流れがそこにおいて展開される時間）という次元が、われわれの身体の生物学的時間、自然の宇宙的時間、そして社会的時間と交差しているところにある。われわれはこれらの時間次元すべてをまとめてそのなかで生きている。」 (Schütz 1970: 181)

(Schütz&Gurwitsch 1985: 363)

- (b) 「確かに、日常生活において、私の今と呼ばれる市民的時間のこれらの断片は、決して充分なあり方では境界画定されていないか、場合によっては境界画定されうるものである。しかしこの断片は、分、時、日、また年という単位によって規定し尽されない遥かに広大な時間——空間に拡大していくフリンジを伴い、そうした周縁的なものをこの今のペースペクティブごとにまとめる中心、すなわち正当にも濃密度の中心と呼ばれうるような中心を持っている。」 (Schütz 2003: 120)

- (c) 「生活世界的時間の構造は、意識の流れ、すなわち内的持続の主観的時間と、生物学的時間たる身体のリズム、世界時間たる季節、社会的時間たる暦の交差において構築される。われわれはこれらすべての領域のなかに同時に生きている。」

- (a) の引用文を見ると、確かに「生活世界的時間」は、「市民的現在」から構成されうる「市民的・標準的時間」と同等の概念であるように思われる。だが、その他の引用文も併せて見れば、それぞれ異なるレベルにある「生活世界的時間」について論及しているようにも考えられる。また (c) と (d) の引用文では、「主観的時間」「内的時間」、「生物学的時間」、「世界時間」「宇宙的時間」、「社会的時間」がそれぞれ並列に述べられているため、各時間の関係が実に見え難くなっている。しかし、このように錯綜した事情がまさしく、「生活世界的時間」というものが重疊的なあり方ではか成り立たないものであることを示唆している。それぞれの引用文によって指示される「生活世界的時間」という概念を統一的な視野に収めるため、まずは下位の時間概念をそれぞれ確認しておく。

すでに論じてきたように、「世界時間」と自然の「宇宙的時間」

は両者とも、意識を超越した「客観的時間」として位置づけることができる。次に「生物学的時間」であるが、この時間は鼓動、呼吸、心拍、注意力の程度、疲労、睡眠のリズムなど、われわれの内的生のうちに、自然のリズムと結びついた固有のリズムと脈動を形成するものである。このリズムが「志向的体験」を根源的に分節化するからこそ (Schutz 1970: 114, Schutz 1981: 149, Schutz 1996: 274) われわれは体験的生の流れの連続性に気づくことができ、あるいはその連続性を空間化しようと試みることができる。この「生物学的時間」は、「内的時間」(志向的体験)における出来事として主観的に体験されるゆえ、ここでは煩雑さを避けるためにも、これを「志向的体験」に回収してしまう。最後に「社会的時間」は、その名称だけではなく、(二) 節後半の引用文中における「社会的な標準的時間」が示す特徴、すなわち相互主観的世界の普遍的な時間構造の基礎として働くという特徴も同様に併せ持つ点で、「市民的・標準的時間」と同等の概念と見て差し支えあるまい。

さて、「主観的時間」は、「内在的―客観的時間」との対比の下にある限りで、いまだ主観性と客観性が分化していない「志向的体験」と差異化された時間であった。それゆえ「主観的時間」は、必ずその背景としての流れを、すなわち「志向的体験」を地平として指示することになる。

そうであるならば、この「主観的時間」と「超越的―客観的時間」の交差から生じる「市民的・標準的時間」は、確かに「核としての

生活世界的時間」を構成すると言えるのであるが、しかしより枢要なあり方として、その周縁において、より広い意味での「主観的時間」と「超越的―客観的時間」の交差が、すなわち両者の可能的ないし潜在的な交差が、「フリンジとしての生活世界的時間」を構成していると考えなければなるまい。そうすると、必然的に今度は、「主観的時間」と「超越的―客観的時間」がそこにおいて交差しうる「志向的体験」の位相がさらに、「フリンジとしての生活世界的時間」の地平を構成することになる。「志向的体験」は、いわば時間地平の時間地平として、生活世界的時間の構造的まとまりを越える遥かに広大な領野に限りなく拡がってゆくのである^③。

この際、ある時間系列、例えば「客観的時間」が主題化されるならば、一方でそれが「主観的時間」と差異化されると同時に、この「客観的時間」は、「志向的体験」と差異化される、あるいは差異が顕在化する。また他方で主題化された時間系列と、全体としての「生活世界的時間」が差異化される、あるいは差異が顕在化する。かくして「生活世界的時間」は、主題化された時間系列の背景として退くことによって、非主題的なあり方で流れ続けてしまう。しかし、だからこそ、「生活世界的時間」とは、決して時間のなかに存在するものではなく、まさしく時間それ自体なのであり、そのようなあり方で、われわれの行為の包括的な時間枠組として機能するのである。

なお、ここである時間系列が主題化されるというのは、対象ない

し出来事が当該時間系列の一点に位置づけられることを意味する。ここから、時間系列の交差ということの内実が見えてくる。交差とは、外延の一部が相互に重なり合うという、論理学上の概念である。従ってそれぞれの時間系列には一対一で対応する同時性は存在しない。その結果、「間隙」が生じ、この「間隙」が「待機」という独特の現象をわれわれに賦課することになる。シュッツは、「一杯の砂糖水を用意しようとすれば、砂糖が溶けるまで待たなければならぬ」という、H・ベルグソンの例を用いて、次のように説明している。「私の内的時間の流れは、外的時間のなかで生じる一連の出来事とは独立に進行しており、私が待っているのはその一連の出来事なのである」(Schutz 1970: 181, cf. 1996: 254)と。ここには、内包的な「志向的体験」と空間的な外延との関係性が端的に示されている。

結論

「生活世界的時間」は三つの位相から成り立つ単なる形式的時間ではなく、行為者にとってその都度、社会的な様相を帯びて立ち現れる時間でもある。この含意は、他者の問題、とりわけ社会性の諸レベルを考えるにあたって示唆的である。ここでは、(三)節の終わりに問題として残しておいた、「主観的時間」のバースペクティブが異なりうるような他者との社会関係を、引用文(a)の「他者

の今を市民的現在のなかに組み込む」という事態と併せて検討してみたい。私と他者の「時間バースペクティブ」が異なるという場合、もちろんこの対比が行われているのは、水平的レベルにある「主観的時間」においてではなく、垂直的レベルにある「志向的体験」においてである。私と他者の間の不一致は、両者が同時に所属しているより広い領域を前提にして初めていいうることだからである。この対比を捉えている「志向的体験」は、誰もがそこから抜け出すことができない限り、それと対比される「時間バースペクティブ」はありえない。その意味で、「志向的体験」それ自体には外部がないのである。

しかしわれわれは、自らの生にとって不可避な他者の存在によって、「志向的体験」を空間化しよう強いられる(Schutz 1981: 81)。他者の内在的レリヴァンスが賦課されることで、自らの内在的レリヴァンス体系を追求する自由が制約されるのである(Schutz 1970: 113, 1964: 128)。他者の行為が、私の自明視された諸々の「時間バースペクティブ」を様々な程度で突き崩すとき、私は問題解決のために、企図の構成を通じて、「志向的体験」から「主観的時間」に移行しなければならない。そして「ワーキング」を通じて「市民的・標準的時間」が構成されることになるわけであるが、その際、まさしく相互の行為を調整する志向性の下に、この「市民的・標準的時間」が構成されることになるのである。つまり「他者の今を市民的現在のなかに組み込む」という事態のひとつのあり方は、「私の今」

と、私の今を様々な程度で超越した「他者の今」が、両者にとって同一の客観的基準たりうるような「市民的・標準的時間」を構成するということなのである。

ここにおいて、「志向的体験」から行為を媒介にして、「核としての生活世界的時間」たる「市民的・標準的時間」が構成され、翻ってこの「市民的・標準的時間」が、「フリンジとしての生活世界的時間」のみならず、「志向的体験」まで構成するという、自己言及的循環を見出すことができる。それゆえ、行為者が「生活世界的時間」に置かれている限り、時間を構成する孤立した意識の無限進行は回避され、その代わりに社会的行為者、従って社会的自我を「志向的体験」上に位置づけることが可能になる。「志向的体験」と「客観的時間」という二項対立関係における価値序列化の陥穽に嵌まることなく、両者は「生活世界的時間」構造の下に相対化され続けるのである。

そしてここまで到達して、本稿冒頭の「意味問題は時間問題である」という定式化について、次のように補言することができる。すなわち、意味は行為を媒介として時間に準拠すると同時に、時間もまた行為を媒介として意味に準拠する、と。かくして本稿に始まる「生活世界的時間」の解明は、その端緒において、ベルグソンの二元論的思考が持つ限界を指摘し、「質的多様性」によって特徴づけられる本来的な生のあり方と、「量的多様性」によって特徴づけられるシンボル化された生のあり方との相互嵌入を主題化したシュッ

ツの問題関心に方向づけられながらも、そうした関心を越えて、その内に「歴史的時間」をも含み込むような「生活世界的時間」のさらなる地平の探求へと導かれてゆくのである。⁽¹⁰⁾

【脚注】

- (1) 本稿では、身体運動に基づく空間地平の構成について立ち入って論じることではない。ここでは身体運動それ自体が、機能連関たる身体についての体験をシンボル化することによって、われわれは自らを空間的延長を持った身体として体験すること、このシンボル化を契機に、「今ここ」の身体を中心として、時間—空間地平に開かれた「原点たる自我」が構成され、「行為する私の生活形式」へ移行する（Schütz, A. 1981: 157-9, 178-85）、時間—空間地平について言えば、「今ここ」から、空間地平としての「そこ」へ拡がる地平志向性は同時的であり、これは「原印象的位相」において「かつて」あるいは「やがて」という、「過去把持」あるいは「未来予持」が現前する時間的同時性でもあること、以上の論点を確認しておけば十分である。なお、『生活形式の理論』（Schütz 1981）の概略あるいは詳解については、次の文献が参考になる。（Langsdorf 1985, 森一九九五、Wagner & Strübar 1981）

- (2) 本稿では、複数の諸企図の間で選択を行う際の「志向的体験」のあり方について立ち入って論じることではない。この論点については、次の文献を参照されたい。（Bergson 1889, 那須一九九一、一九九二）ここでは、企図の構成、従って諸企図間での選択もまた、「主観的時間」、従ってすでに境界づけられた問題領域（意味領域）内部での継起的な構成過程において行われ、そこにおいて「志向的体験」と「主観的体験」間の往来がなされるという点のみ指摘しておく。

- (3) ジェイムズの「フィアット」という概念、及びシュッツの行為論における「フィアット」の位置づけについては、それぞれ次の文献を参照された

い。(James 1960, 那須 一九九一)

- (4) 「ワーキング」という概念において注目すべきことは、それがひとつの行為類型として、究極的には「根本的な不安」体験から導かれて生じ、従って不合理性によって特徴づけられる「理由動機（理由レリヴァンス）」というよりもむしろ、ひとたび確立された「至高の企図」から順次段階的に生じる「目的動機」（目的レリヴァンス）に基づいて展開される合理的な行為の位相に照準が定められて構築されているということである。ここに、「ワーキング」が「実践的行為」として特徴づけられるひとつの論拠がある。

- (5) 例えば、現在の私にとって暦の日付は、論文を締切日までに提出しなければならぬという、当面の目的に動機づけられた行為との相関において特有の意味を持つし、時計の針が示す同一の時間もまた、自然のリズムに合わせて規則正しい生活をしている友人と、不規則な生活をしている私とは、それぞれ「時間の意味」が異なってくるのである。

- (6) Muzetto は、「主観的時間」を「持続」と「宇宙的・客観的時間」の交差から生じるものと解釈し、従って「主観的時間」を「客観的時間」と符合させる迂回手続きを経ずに、直ちに「われわれ関係」の構成的要件たる「生ける現在」と等置している。その結果、「われわれ関係」の時間的位置づけに深刻な不具合を来たしている (Muzetto 2006)。本稿の立場から言えば、「われわれ関係」は、「主観的時間」と「宇宙的・客観的時間」の交差する一点において成立する関係ではなく、従って諸企図がそこに位置づけられる諸々の交差点それ自体ではなく、それら諸々の交差点の間の諸位相、すなわち「進行中の行為」の諸位相において成立する関係である。「交差」という概念が持つ含意については(四)節において改めて論じる。なお、「われわれ関係」における「志向的体験」のあり方については、「対象化・類型化」の視角から論じたことがある。拙稿(飯田二〇〇六)を参照されたい。

- (7) 身体運動を空間化することから始めて、すなわち身体運動を動いた物体の通過した軌跡あるいは軌道として捉えることから始めて、シュッツは、

次のように、時間次元が段階的に生じてくるものと見ている。「空間に投影された内的時間は、われわれの行為がそこにおいて生起する次元になり、われわれが仲間と共有する次元になり、引き続いて生じる理念化によって、宇宙的時間、ないし物理学者の時間として考えられる次元となる。この空間化された時間は、計測されうるし、均等な諸部分に分割されうるものである。しかし時間の計測は、地球がその地軸を中心に自転する際や、太陽の周りを公転する際に通過する道程にせよ、時計の針が文字盤を回る道程にせよ、すべて空間的距離の計測によって行われる。最終的な形式化においては、こうした外的時間の概念はリーマンのいう四次元の連続体へとゆき着く。そこにおいて時間は、空間の三次元に続く第四の次元という数学的機能を持つのである。」(Schutz 1966: 264) 従って、われわれの意識は超越しているけれども、物理学者あるいは数学者の意識にとっては志向的な対象であるような「客観的時間」を、絶対的な実在とみなすことはできない。「客観的時間」は本来的に、「内的時間」と関わりなく見出しうる実在ではないからである。但し、ここではニュートン物理学における「絶対時間」を想定しており、相対性理論あるいは量子論における時間についてはこの限りではない。

ここで、「宇宙的・客観的時間」と「市民的・標準的時間」について常識的な範囲内で注釈しておけば、一般に「宇宙的・客観的時間」は、以前であれば地球の自転を基準にした「地球時間」や天体の位置を基準にした「暦表時間」を指し、現在では「国際原子時間」を基礎にした「協定世界時間」を指している。現在のわが国では「グレゴリオ暦」の採用とともに、この「協定世界時間」に九時間を加えた「中央標準時」が採用されている。しかしわが国でも江戸時代までは「不定時法」が採用されていたように、単一の国家内においてさえ、時代によって「宇宙的・客観的時間」が異なりうる以上、「宇宙的・客観的時間」と「市民的・標準的時間」の境界は相対的なものであり、場合によっては「宇宙的・客観的時間」も広い意味での「市民的・標準的時間」とみなすことができるのである。

なお、一九三七年の草稿 (Schutz 2003) においては、「外的時間」ある

いは「客観的・宇宙的時間」の代わりに、「世界時間」という概念も用いられており、とりわけM・ハイデガーの思想との関わりを見てゆく上で実に興味深い。T・ルックマンの執筆による『生活世界の構造』(Schütz & Luckmann 1979, 1984)においても「世界時間」という概念が頻繁に用いられているが、シュッツが遺した一群のカードとノート (Schütz & Luckmann 1984) に、この概念を見出すことはできない。

(8) 敷衍するならば、相互行為に支障が生じる場合に、あるいは他者性の賦課的契機において、ある種の意味領域が共有されていたことが判明するのであって、その逆ではない。意味の不一致という事態は、共通の意味領域を前提にしている。否、厳密に言えば、同時に、あるいは適及的に共通の意味領域を構成する。そもそも一致が成り立ちえないところでは、不一致ということが意味をなさないからである。意味領域とは、さらなる分節化と包括化に開かれた相対的な概念であって、その境界の画定範囲と妥当性は、潜在的なあり方にせよ、顕在的なあり方にせよ、社会的相互行為における両者の合意(強制・任意いずれも含む)によってその都度決定される。問題の状況における意味領域の境界画定が、一方で意味領域は共有しているが意味は不一致という事態を成立させ、他方で問題となっている意味領域それ自体は共有していても、それより広い意味領域は共有しているという事態を成立せしめるのである。なお、相互行為に支障が生じていない場合については、そこにおいて、たとえ「相互視界の一般定立」(Schütz 1962: 12) が想定されているとしても、意味領域が境界画定されていない限り、すなわちそれが自明視されている限り、決して特定のものが共有されているとは言えない。しかしまた、その限りで、われわれは様々な限定的な意味領域、従って様々な「時間パースペクティブ」を同時に生きている、とも言っているのである。いずれにしても、ジェイムズの下位宇宙論ではなく、シュッツの多元的現実論に導かれる限り、意味領域が確固たる実体として存在していると想定することはできない。以上の論点は、限定的な意味領域の構成原理であるレリヴァンス概念にも妥当する。これらについては、「相互主観性」という概念が導入されると同時に、諸々

のレリヴァンス、及びそれらの相互依存性に関する考え方は全面的に改訂される必要がある」(Schütz 1970: 74) という、シュッツの注目すべき警笛と関わらせた上で、稿を改めて論じなければなるまい。

(9) 「生活世界的時間」において、われわれの実際の行為が、企図において予想された通りの経過を辿らない場合、例えば企図が行われた当初には思いもよらなかった新たな問題的状况が生じて行為が不首尾に終わったり、新たな主題に対処するために行為を中断したり、当初の企図を修正したりする場合や、あるいは「生物学的時間」によって、行為の中断、休止を余儀なくされる場合に、われわれが「生活世界的時間」の内部において改めて企図を構成し、「生活世界的時間」をより一層多時間的、多元的なものにするという、より日常の実態に即した事情については、煩雑さを避けるためここでは立ち入らない。

(10) 本稿は、確かにシュッツ理論に内在的な研究を志向しているが、しかしより大きな視野の下では、E・デュルケムの思想をその端緒とし、今では社会学のひとつの主題となっている「社会的時間論」に対する基礎づけもまた同時に志向している。だが、いずれにせよ本稿では、近・現代社会に特有な時間の諸問題、例えばグローバル化を背景にした「宇宙的・客観的時間」の肥大化と、そうした超越的時間による人間の生の支配、あるいは時間的秩序の制度化に基づく時間の社会的統制といった、あくまでも経験的な研究に開かれた具体的な諸問題については、埒外とせざるを得ない。従って、ここでは差し当たり、この種の問題に対する著名な古典的研究として、次の文献を紹介しておく。(Hall 1963, Moore 1963a, 1963b) また、主観的に構成される時間と社会構造によって産出される客観的時間を時間の二つの根源として析出し、シュッツの時間論を独自のパースペクティブの下に展開させている研究として、次の文献がある。(Sprabar 1979) なお、社会学におけるN・ルーマンやシュッツ等の時間論だけではなく、様々な学問領域における時間論を批判的に整理・検討しつつ、社会学的時間論の総合的な構築を積極的に志向している研究としては、そこでの議論を支持するにせよ、批判するにせよ、次の文献が優れている。(Adam 1990,

1995, Bergmann 1981, 1983)

【引用・指示文献】

Adam, B. 1990. *Time and Social Theory*. Polity Press.

(伊藤 哲・磯山 甚一訳, 一九九七『時間と社会理論』法政大学出版局)

——, 1995, *TIME WATCH*. Polity Press.

Bergmann, W. 1981, *Die Zeitstrukturen sozialer Systeme*, Duncker& Humblot.

——, 1983, “Das Problem der Zeit in der Soziologie,” *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 35: 462-504. (Trs.Cooper, B. 1992 “The Problem of Time in Sociology,” *Time&Society*, 1(1): 81-134.)

Bergson, H. 1889, *Essai Sur Les Données Immédiates De La Conscience*, Press Universitaires de France. (平井啓之訳, 一九六五『時間と自由——意識の直接性とそのもの』白水社)

Hall, A.T. 1983, *The dance of life*, Anchor Press.
(注波 義昭, 一九八三『ダンス・オブ・ライフ』トモスミヤ)

Husserl, E. 1950, *Ideen zu Einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch, Husserliana Bd.III, Martinus Nijhoff.

——, E. 1969, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*, Husserliana Bd.X, Martinus Nijhoff.

飯田 卓 一九〇〇年「A・シュタインの思想における我々の領域と社会性」——W・フーバーの我—汝関係を媒介にして」『社会学評論』五七(一): 二二—五—四〇

James, W.1950 (1890) , *The Principle of Psychology vol.II*, Dover Publication.

Langsdorf, L. 1985, “Schut’s Bergsonian analysis of the structure of consciousness,” *Human Studies*, 8(4): 315-24.

Moore, W.E. 1963a, *Man, Time and Society*, John Wiley&Sons. (武上 肇)・

長田 攻一訳 一九七四『時間の社会学』新泉社)

——, 1963b, *Social Change*, Prentice Hall. (松原洋三訳, 一九六八『社会変動』至誠堂)

森 元孝, 一九九五, 『アルフレート・シュタインのウィーン——社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』新評論

Muzzetto, L. 2006, “Time and Meaning in Alfred Schütz,” *Time&Society*, 15(1): 5-31.

那須 壽 一九九一, 「A・シュタインにおける行為理論の構想」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』三七: 六一—七四.

——, 一九九二, 「現象学と社会学——社会学の『基礎づけ』の諸相」『情況』別冊: 八六—一〇三.

——, 一九九七, 『現象学的社会学への道——開かれた地平を求めて』恒星社厚生閣

Schutz, A. 1962, *Collected PapersI: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff.

——, 1964, *Collected PapersII: Studies in Social Theory*, Martinus Nijhoff.

——, 1966, *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, Martinus Nijhoff.

——, 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, Yale University Press.

Schutz,A.& Luckmann,T., 1979, *Strukturen der Lebenswelt*, Bd.1, Suhrkamp.

——, 1984, *Strukturen der Lebenswelt*, Bd.2, Suhrkamp.

Schutz,A. 1981, *Theorie der Lebensformen*, Suhrkamp.

Schutz,A.&Gurwitsch,A.,1985,*Alfred,Schutz/Aron,Gurwitsch Briefwechsel 1939-1959*, Wilhelm Fink.

Schutz, A.1996, *Collected Paper IV*, Kluwer Academic Publishers.

Schutz, A.2003, *Theorie der Lebenswelt I: Die pragmatische Schichtung der*

- Lebenswelt*. Alfred Schütz Werkausgabe V.1, UVK.
- , 2004[1932], *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Alfred Schütz WerkausgabeII, UVK.
- , 2006, *Sinn und Zeit: Frühe Wiener Arbeiten und Entwürfe*, Alfred Schütz Werkausgabe I, UVK.
- Srubar, I, 1979, "Die Theorie der Typenbildung bei Alfred Schütz. Ihre Bedeutung und ihre Grenzen," Sprondel, W.M., & Grathoff, R., (eds), *Alfred Schütz und die idee des Alltags in den Sozialwissenschaften*, Enke.
- Wagner, H.R., & Srubar, I., 1981, *A Bergsonian Bridge to Phenomenological Psychology*, Center for Advanced Research in Phenomenology & University Press of America.

【付記】 本稿は、二〇〇六年度第三回日本現象学・社会科学会大会における報告原稿を原案に、加筆、修正を施したものである。